

再建と再会：学術用語「民具」の 中国民俗学界への紹介をめぐって

余 瑋

Yu Wei

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】本稿は、中国民俗学においてこれまで軽視されてきた物質文化研究の視点から中国民俗学史の再検討を試みる。主に「民具」という言葉が一つの学術用語として中国民俗学界において、誰がどのような経緯で紹介するに至ったのか、「民具」「民具学」に関する研究をどのような方法で中国側に紹介したのかについて、学史の検討と関係者への聞き取り調査によって明らかにする。

本稿で取り上げる中心的な人物は、王汝瀾という女性研究者であり、取り扱う時期は主に1980年頃のことである。その時期は、中国民俗学の再建をめぐり日本民俗学界との交流も再び行われていた。日本の民具研究に関わる紹介も、中日両国の間で、学問の伝播と交流の歴史の一環として追跡できる。

王汝瀾は1930~40年頃に日本への留学経験があり日本語が堪能であるため、通訳者と翻訳者の役割を果たし中日民俗学の再交流に力を尽くした。彼女は二度目に訪日した1980年代に、日本の民具研究に関わる翻訳や紹介論文を中国民俗学界に発表した。

しかし、短い滞在期間であったため、彼女はアチック・ミュージアム（以下、アチックと表記）時代からの「民族的」民具研究についての理解が乏しかった。そして、彼女が来日した頃は、日本各地の民俗博物館、民具資料館が続々設置されつつある時期でもあった。それゆえ、「民具」を通して「有形民俗資料」の重要性を感じた彼女にとって、具体的な民具に関する学術研究の展開方法を提示するより、民俗博物館を建設するという発想の方が強くなった。ただ、残念ながら、その後、彼女は「民具」と「民俗博物館」の両方の紹介を進めることはなかった。

一方、その時期、中国民俗学界において大学の人材育成の準備に伴い、訪日するアカデミックな研究者が増えており、中日民俗学の交流もますます深くなった。そのうち、人数は少ないものの、日本の民具研究に注目し、王汝瀾より詳細な紹介論文を発表する学者も現れた。また中日国交の進展により、日本文化研究の枠組みのなかで、民具研究についての交流も行われた。

Rebuilding and Reunion:

Introduction of the Academic Term “Mingu” to the Chinese Folklore Society

Abstract : This paper attempts to reconsider the history of Chinese folklore studies from the perspective of material culture research, a point of view neglected in past Chinese folklore studies. Through an examination of academic histories and interviews, this paper will reveal how and by whom the academic term mingu (everyday objects) was brought into Chinese folklore studies as well as how research on mingu and its study field was introduced in China.

The focus of this paper is the researcher Ru-lan Wang and her work circa 1980. Around this

time, Chinese folklore society had resumed relations with Japanese folklore society to help rebuild Chinese folklore studies. The introduction of Japanese *mingu* research into China can be traced back in part to the history of Sino-Japanese academic collaboration and exchange.

Wang had studied in Japan sometime between 1930 and 1940. A fluent speaker of Japanese, she dedicated herself to rekindling relations between communities involved in Chinese and Japanese folklore studies by serving as an interpreter and translator. In the 1980s, after her second visit to Japan, she presented her translations of Japanese *mingu* studies and papers introducing this subject to the Chinese folklore society.

Her stay in Japan was short, however, and she had limited understanding of *mingu* research with an ethnological perspective, an approach conducted from the time when the Institute for the Studies of Japanese Folk Culture was called the Attic Museum (hereinafter written to as the Attic). It should also be noted that she came to Japan at a time when there was a rush of folklore and *mingu* museum openings. Working with *mingu*, Wang came to appreciate the importance of tangible folklore materials and was more strongly attracted to the idea of building folklore museums than to advocating specific ways of developing academic *mingu* research. Sadly, she did not attempt to promote *mingu* or folklore museums after this time.

In the meantime, a growing number of Chinese scholars visited Japan as part of the Chinese folklore society's efforts to build human resource capabilities at universities, contributing to deeper relations between the folklore societies of the two countries. While few in number, scholars emerged who undertook Japan's *mingu* research and produced papers on the topic more detailed than those written by Wang. Improved Sino-Japanese relations also allowed *mingu* study collaborations within the framework of Japanese culture research.

はじめに

一般的に言って、中国民俗学の始まりは文学ないし文芸との関係が強く、または、中国民俗学を再建する際、民間文芸研究会が受け皿になっていたことも注目されたように（佐野 1987:5）、従来の中国民俗学研究が民間文学や、口承文芸を中心に持ち上げたのも不思議なことではない。学史研究に触れると、この状況はあまり変わらないといえよう。現代中国民俗学史の研究は民間文学研究史の枠内で検討された場合が多く、ほかの視点から省みることはめったにない。中国民俗学界には、いまだに学史への反省は珍しいといえよう。近年では、「物質民俗」あるいは「物質文化研究」の視点から研究史を整理する論文が発表されたが、率直に言えば、これらの検討はまだ不十分だといえよう。もちろん、先学たちに対して「物質民俗」研究に疎いといった非難をするつもりはない。むしろ、ここには、彼らの学史に対する見方があるように思われる。

しかし一方で、ここ数年は中国民俗学研究の社会科学への転向が目立つようになり、時代の要請を敏感に取り入れ、斬新な角度（いわゆる今まで看過されてきた研究者の再発見とその業績の再評価）から学史を書き直す学者もいる。その変化を踏まえ、筆者は今の時代だからこそ、様々な立場から学

史を検討するという可能性を視野に入れるべきだと考え、「物質民俗」の視点から学史を描こうとする試みが必要だと強調したい。

そして、民俗学という学問は、全く内発的な発生ではなく、海外の学問状況からの刺激と、それへの批判、内省のなかで誕生した（田村 2017：24）という考えを持つ学者がいるが、今までの学史研究では、国際学術活動、いわゆる研究者たちの海外活動に照準を合わせて考察する例は稀である。⁽⁵⁾一方、現代中国民俗学史を研究する施愛東は、中国現代民俗学の建設と同時に、日本民俗学も盛んに進んでいたが、各自は独立したまま進展してきたようであり、相互の間に密接的な関係を築けなかった（施 2011：5）と指摘している。ただし、施はその詳細について明らかにしておらず、まさにそこから、筆者の疑問は生み出された。築けなかったというのは、どういうことなのだろうか。彼のような結論を出すに至るまでは、まだ議論する余地があるのではないか、ここから、新たな言説の空間を開く可能性があるのではないかと考えられる。

学史が書かれるときは、分析の視角は一番大事なことで、それゆえ、本稿は施が等閑視したところから考え始めたい。具体的には「民具」という学術用語が中国民俗学界へいかなる経緯を経て紹介されたのか（翻訳、引用、紹介論文を含む）、物質文化（物質民俗）⁽⁷⁾研究の端緒も視野に入れつつ、中国民俗学界の学術交流の歴史を考えてみたい。なお、本論で引用する中国語文献は全て筆者の翻訳による。

I 中国民俗学の夜明け

文化大革命の終焉に伴い、⁽⁹⁾1978年夏、7人の教授（顧頡剛、⁽¹⁰⁾白寿彝、容肇祖、楊堃、楊成志、羅致平、鍾敬文）が連名で「民俗学の建立及び関連する機関についての提議書（建立民俗学及有关研究機構の唱議書）」という建白書⁽¹¹⁾を出し、まもなく、中国社会科学院のトップクラスからの同意を受け、民俗学が「哲学社会科学」全般における学問建設を完備するための計画に入り、1番から22番までの企画学科の間、15番目の学科に列した。続いて、その年の12月30日、⁽¹²⁾烏丙安、⁽¹³⁾劉航舵が「中国民俗学を再建するための新しい課題（重建中国民俗学的新課題）」という提唱書（翌年の4月20日に中国社会科学院の機関誌に発表された）を中国社会科学院共産党委員会に提出し注意が喚起された。これらのように、様々な関係者の尽力によって、1979年11月1日、中国文学芸術工作者第四回代表大会、及び中国民間文学工作者第二回代表大会で、民俗学に関する研究機関の成立が認められ、年末に、中国民間文芸研究会内に「民俗学研究部」を設立した。中国民俗学界の一部の学者は、これまで回顧する余裕もなかった状況を一変させようという決意をした。

しかし、この再建が始まった1980年代には、学問と政治の関わりが依然として強く、機関誌で政策の動向についての記事を堂々と掲載することも珍しくなかった。民俗学は一種の実学と目され、その研究と社会的効用との関連が意識されるようになったといえよう。⁽¹⁴⁾しかしながら、民俗学を再建する際、純粋な学問という面が極めて重要なことで、特に、外国に比べ、学問の進展の程度は一足遅れているという実情を踏まえ、当時の学者たちは危機感を持っていた。

中国民俗学の長老、または現代中国民俗学の再建のリーダーであった鍾敬文が様々なことに配慮し

た。特に、「民俗学の知識は、全国解放前にも広く伝播されていなかったし、解放後の20年余りの間も、閉じ込められた状態のまま。それゆえ、この辺についての知識を伝播するのは、目の前の一番緊迫し、負担が重い任務である」（鍾 1985：9）という認識が強く、外国の著作の翻訳、論文の紹介と国際シンポジウムの開催などを重視した（鍾 1999：67-71）。

鍾敬文自身が日本への留学経験（1934-1936）があり（加藤 1991：118-128）、日本民俗学の影響を受けて視野を広げ、民俗学の研究対象についての認識が変わったと記している（鍾 2002：49-50）。日本滞在の間、ドイツ民俗学⁽¹⁵⁾の動向までも留意した（董 2002：17）彼が、帰国後、日本で読んだ一部の本を翻訳すべきだと考え、ほかの学者たちに勧めた（鍾 1984：5-6）。

端的にいうと、前述のような状況において、当時の中国民俗学界は、日本との断絶を解消し、改革開放の波に乗っており、学者らの訪問交流を通じて日本民俗学との再会を果たした。1980年12月10日から16日まで、日本から来た代表团との初めての交流を果たした後、両国の学術交流はますます頻繁になってきた。

晩年の鍾敬文は、体調が思わしくなく、日本に赴く予定があっても、訪問することができなかった。しかしながら、日本語が堪能な同行者や、若き民俗学徒らと提携し、現代中日民俗学の架け橋となった（丘 1988：57）。したがって、本文で主眼を置く日本の民具研究⁽¹⁶⁾に関わる紹介も、このような学問の伝播と交流の歴史の一環として追跡できる。

II 学術用語としての「民具」の登場

(1) 「全国民俗学講習班」と『民俗学講演集』

「民具」という言葉が今の中国の学界（民俗学界でさえ）においていまだに定着していないのは紛れもない事実である。では、一つの学術用語としての「民具」は、一体いつ、誰が、中国民俗学界に論文を紹介したのか、という単純な疑問から検討に入ってみよう。

その問題については、周星の論文（周 2018：37）では手短かに触れられていたが詳しくは展開されていなかった。そして、管見の限りでは、「民具」という言葉が最初に登場したのは張紫晨が編集した『民俗学講演集』という本⁽¹⁷⁾である。この『民俗学講演集』は、張が執筆した「はしがき」によると、中国民俗学会が1983年8月⁽¹⁸⁾に主催した「全国民俗学講習班」に参加した学者たちが発表した講演文の一部を集めたものである。

その「全国民俗学講習班」で講演をした人物のなかには、伊藤清司がいた。『民俗学講演集』に収録された彼の文章（伊藤 1986：148-159）は王汝瀾が翻訳したものであり、当時の王は通訳者の役割を果たしたと推測できる。次に、注目すべきは、『民俗学講演集』のなかに収録された王自身が書いた「日本民俗学発展概述」という文章（王 1986：127-147）である。

この文章は、日本民俗学の発展を六つの段階に分けて説明しており、第二の段階「『郷土研究』時期（1907-1924）——日本民俗学的開端」のところで、「物質技術文化」の面から紹介する際に、渋沢敬三と「民具博物館」について言及した。また、王は、柳田以外、高木敏雄、折口信夫、渋沢敬三らも日本民俗学の開拓者と位置付け、中でも、渋沢敬三が民俗学の草創期から民具を通じて民衆生活文

化史を研究するという卓見を提出し、それは、日本の民族学と民俗学博物館の事業の第一の土台になっ
⁽¹⁹⁾たと高く評価していた。では、王汝瀾について詳しく紹介しておこう。

(2) 媒介者としての王汝瀾と「民具」のこと

① 留日経験

王汝瀾(1920-2010)は1920年に中国の吉林省(原籍ではなく)に生まれ、1937年に吉林の高校を卒業し、国立北京女子師範学院(現北京師範大学)に進学した。1939年に、彼女は学校から選抜され日本に公費留学した。1940年6月には、東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)に在籍(文科)したが、その後早稲田大学に転校した。1943年4月には、早稲田大学の文學院の史学科で東洋史を専攻したという記録が残されているが、翌年(1944年)の名簿には彼女の名前は確認されていない。どのような事情なのかよく分からないが、父の葬式に参加する理由で、1943年に帰国した後、戦争のため日本に戻る機会が一切なかったといわれることもあった。⁽²⁰⁾⁽²¹⁾すなわち、卒業はしなかったという可能性がある。中国に帰った後、彼女の経歴について確認できる資料は見当らなかったが、解放前は輔仁大学に勤めたこともあった(王文寶 1995: 490; 王京 2008: 160)。

② 訪日交流

引き続きでは、王汝瀾が当時の中国民俗学界においてどんな役割を果たしたのかについて、幾つかの事例を通じて明らかにしたい。

1981年8月20日から26日まで、「遼寧省首界民俗学学術討論会」が遼寧省で開催された。この会議は「中国民俗学会誕生以来の初めての学術会議」といわれ、また「中華人民共和国成立後第一回の地方民俗学会」と称される「遼寧省民俗学会」もその際に設立された。そして、「中国民俗学の父」と呼ばれた鍾敬文は、その会議の途中で一部の学者を集め「座談会」を開き、王汝瀾も代表者として参加した。さらに、会の後、彼女が鍾敬文とほかの三人(王文寶⁽²²⁾、柯楊⁽²³⁾、張振犁⁽²⁴⁾)の男性研究者と一緒に、鴨緑江で舟に乗り遊覧し、五人だけの集合写真が残された(施 2018: 6-7)。

1982年3月8日、当時、中国民間文芸研究会の民俗学部(副主任)に勤務する王汝瀾は、副主席の賈芝⁽²⁵⁾と馬学良⁽²⁶⁾両氏とともに、日本口承文芸学会と中国民話の会に招待され来日した(王 1982: 61-67)。40年ぶりの日本再訪のため、彼女は北京出発の前夜は一睡もできなかった(加藤 1986: 15)ほどだが、たった12日間だけ滞在し19日に帰国した。1982年6月12日、中国社会科学院民族研究所で開催された中国民俗学会の第一回の予備会議に参加した学者のなか、女性はたった三人のみで、王はそのなかの一人であった(王文寶 1995: 366)。そして、1983年5月20日の夜、鍾敬文が召集した中国民俗学会の創立大会の予備会議で、参加者たちは王汝瀾が手書きした「学会機構の参考名簿」に基づいて討論していた(施 2018: 21)。

1983年9月14日、王汝瀾は中国民間文芸研究会の書記及び『民間文学論壇』の副編集長である陶陽⁽²⁷⁾とともに「訪問学者」として再び来日した。今回の滞在期間は予定より長く、4ヵ月間滞在し、1984年1月10日に帰国した(陶・王 1984: 187-194)。

ところで、二回の訪日の間、王汝瀾たちは大阪の国立民族学博物館(民博)を訪問した。第一回は、彼女が民博において中国民俗学の発展状況について講演するためであった(王 1982: 10-13)。ちな

みに、民博は1979年10月25日に中華人民共和国国家民族事務委員会民族文化宮と協約したため、中国側の民族服装、楽器及び生産用具、生活用具などの実物収集や提供などの協力を得た。⁽²⁸⁾また、1981年の海外資料の収集活動により、中国各地の民族衣裳や装身具、楽器、竜骨車と呼ばれる揚水器や農具、生活用具などの資料を収集した。1983年11月の中国地域の文化展示から、主な展示品のなかに民具も含まれていたことがうかがわれる。

③「民具」に対する姿勢

さて、このような流れのなかで、日本の民具研究についての翻訳や紹介はどのような状況にあっただろう。

2005年に出版された『域外民俗学鑑要』は、鍾敬文が書いた「まえがき」の時期（鍾1985：7-10）、⁽²⁹⁾または王汝瀾が書いた「あとがき」（王2005：281）によると、この本は1984年の段階で、すでに翻訳が完成され出版する予定であったが、出版社側の都合により出版は見送りとなった。この本には天野武が書いた『民具のみかた：心とかたち』の第一章「庶民生活のあかし」が翻訳され収録された。⁽³⁰⁾

次に注目したいのは、王が執筆した「略談日本的民具研究」（王1988：152-156）という論文についてである。

この論文の冒頭では、王は次のように述べている。「日本民俗学研究の小史、基本的な理論、基礎知識と研究方法については、近年すでに幾つかの出版物ができた。ここでは、ただ日本の民具研究のことについて少し話したい⁽³¹⁾」。王の見解は、日本の民具研究を簡略に紹介する目的であった。さらに、全文を踏まえると、王の姿勢はそうした経験を参考にしながら中国側の民具研究を展望することであった。

前述した『民俗学講演集』に収録された、日本の民俗学研究を概観し、民具についても少し触れた文章に比べ、この二つの文章は新しい研究の方向性を提示するため詳細に日本民具研究について論じたと考えられる。

二つの文章のうち、一つは天野武の本の一章分の翻訳であり、⁽³²⁾もう一つは、王自身が書いたものである。ここで、指摘しておきたいのは、二つ目の文章を読むと、彼女の論述はやはり天野武の本から強く影響を受けたことが如実にうかがわれるということだ。ただ、天野武の本は、彼自身が言ったように、ヒャクトコテダマ⁽³³⁾を紹介するために執筆されたものであり（天野2019：10）、民具についての一般向き概説書ないしは図録（写真集）というべき性格があろう（天野1983：296）。仮に1983-1984年頃の日本民具研究の進展（宮本常一や宮本馨太郎などが書いた論文、著作もすでに上梓されていた）を考慮に入れると、彼の本は代表的であるとはいえないだろう。

周知のように、日本の民具研究は物質文化研究と深く重なっており、筆者の理解では、二つの系譜に分けられる。一つはアチックからの「民族的」⁽³⁴⁾物質文化研究（「民具」と称するもの自身をめぐって情報の獲得と分析を行うという民具を目的とする）、もう一つは柳田民俗学の立場からの物質民俗研究（世相の変化の史跡を呈し、または民衆ないし民族の心性を解明するため、民具を方法とする⁽³⁵⁾）である。それにもかかわらず、渋沢敬三は民具研究を民俗学の一部門として展開するという考えだった。ただ、日本の民俗学においては、1950年に改訂された国の文化財保護法により民具が文化財と

して扱われ始めてきたよりも前（あるいはもっと粗略に言うと、高度経済成長期以前）は、民具を積極的に取り上げる方向にはなかった（祖父江・大給・中村・大塚 1978：292）。

とはいえ、1974年になると、当時まだ若い民俗学徒から次のような発言も出てきた。「いま民俗学が民族の文化全体にわたる諸問題の追究をその目標とするということが基本的に了解されるならば、精神文化と共に物質的あるいは純粋に技術的な側面（それはモノである民具に端的に表現される）を無視することはできなくなるだろう。そして、そのことは民具研究がそれら民具を生み出し、使用してきた人々の心性まで深く探ろうとする民俗学のなかにあつてこそはじめて本然の形で遂進されることになるということを意味しているといえるのではなからうか」（湯川 1974：3）。というのは、当時の民俗学者らは民具を正面から扱うことは少なかった。だが、1975年には日本民具学会が結成され、その会員の多数をしめるのは民俗学出身の学者であり、彼らの民具研究の具体的な手法については他系との意見のズレがあつた（河野 2003：27）といわれることもあつた。

このように考えると、王汝瀾が文化庁文化財調査官を務めた天野武の本を翻訳し、または自分の論述には、渋沢敬三と岡正雄、宮本常一、宮本馨太郎のほか、天野武の観点だけを示すのも興味深いことであろう。言い換えると、当時ようやく盛んになり始めた日本の民具研究の場から、一部の声しか拾い上げていなかったようである。彼女の論文（「略談日本的民具研究」）に羅列した「五十年代以後、出版された民具研究に関する主要な」⁽³⁶⁾（王 1988：153）著作を検索してみると、本の書誌情報については幾つか間違いがあつた。彼女はこれらの本を直接手に入れて、蓄積された研究事例を精読するより、書籍情報を二次引用しながら紹介していたと推測できる。とにかく、彼女が、民俗学の側から民具のことを知り始め、アチックからの民族学系についての理解が不十分であり、民具研究の動向を全般的に把握するまでには至ってなかつたと判断できる。

それに加えて、「略談日本的民具研究」では、主に「民具研究の初めと発展」「民具研究の意義」「民具の分類、民具群と基本的な民具」「民具の生産者の知恵、感情と審美意識」と四つの面から日本の民具研究のことを紹介した後、王汝瀾は民具研究の意義についてこう述べた。

もし、私たちが民具研究を展開し、民具博物館も建てるようになったら、その意義は多面的だ。第一、歴史の教育方法の改革に役に立つ。例えば、歴史上の農具の進化を解釈する場合には、教科書の中に記されたことを示したり、実物を見ながら説明した方が効果的だ。第二、文学作品の理解をより深めることができる。例えば、伝統的な木紡績機は「木蘭辞」を読む読者に生活の雰囲気を与えるようになる……（中略）……第三、科学技術史の研究に資する……（中略）……第四、国際的比較研究を推進する……（後略）……（王 1988：156）。

これらの考えは、先年、ほかの同志と一緒に日本の民族学、民俗学、歴史学、考古学に関わる大、中型の博物館と中、小型資料館を見学した後生み出したものである。そのとき、自然に思いついたのは、我が国の博物館事業のことだ……（中略）……我が国にはまだ民族の基層文化を反映する大、中型の博物館、また日本と対応する中、小型資料館も少ない……（中略）……感慨にふけるうち、自分にこう言った「淵に臨んで魚をうらやむより自分で網を結べ」。今日はこの問題について少し話をしたが、これは同志ともに根気を持ちながらこれから「網を結べ」

という宿願を実現するつもりだ……（後略）……（王 1988：156）。

いわゆる、具体的な民具に関する学術研究の展開方法を提示するより、「民具」そのものを通して「有形民俗資料」の重要性を感じた彼女にとって、博物館を建設するという発想が一番強くなった。参考として言っておくべきなのは、1976年に第28回の日本民俗学会年会シンポジウム「地域と民俗博物館」が開催され、また一部の報告は翌年の『日本民俗学』（109号）に収録された。1977年に『全国民俗博物館総覧』も刊行された。彼女が来日したときは、日本各地に民俗博物館、民具資料館が続々と設置されつつある時期であった。⁽³⁷⁾ 帰国後、同行者と一緒に書いた訪問報告によっても、彼らに一番衝撃を与えたのが博物館の発展だったことがうかがわれる（陶・王 1984：190-191）。そのほか、当時中日民俗学の交流は、一瞥しても分かるように、民間文芸を中心に行われ、王と同行者らの講演主題も例外なく（今になっても中国の民俗学研究の主流な分野である）「民間文学」をめぐるものだった。短い滞在期間では、民具研究の系譜、流派あるいは具体的な研究手法などを勉強し、民具についての知見を深める余裕がなかったのである。

ところで、日本側においては、王汝瀾が帰国した数日後、岩井宏實が「民具研究の軌跡と将来」（岩井 1984：223-249）という論文を発表した。この論文は民俗学の視座からは生まれなかったような新たな方向性が示され始めた（湯川 1984：33）と評価された。というのは、そのとき、日本側の研究者たちが、すでに民具研究はただ民俗学の一環として見なされるべきだということを反省し始めたためである。残念ながら、王汝瀾はこの後の数年、ずっと中日間の学術交流のため翻訳を続けていたが、民具についての紹介は行わなかった。

Ⅲ アカデミックな国際交流と民具の研究

それでも、日中の民俗学界の交流が進むうちに、「民具」をめぐり、王汝瀾のほかにも幾つかの痕跡が残されていた。

(1) 『中外民俗学詞典』の編集

1980年代に入り、中国の大学においても民俗学教育の準備が次第に整い、後継者の養成も重視されるようになった。それゆえ、当時、両国間の交流は、中国民間文芸研究会のほか（加藤 1986：11-17）、大学側からの系譜があった。人材育成のうち、日本語が堪能な人は、国立歴史民俗博物館、筑波大学、東京都立大学などを訪問研究したり（丘 1988：57）、または直接日本側の研究者を中国へ招いたりしたケースもあった。例えば、1985年9月、山東大学（文学系）の誘いに応じて山口大学人文学部に在職した鈴木満男⁽³⁸⁾が訪中し、およそ二か月の間滞在した。加藤千代が1983年から北京師範大学中文系民間文学教研室に一年間留学し、その後も同校で訪問学者と客員教授になる経験もあった。⁽³⁹⁾ この二つの大学は、今になっても、中国民俗学の若き学徒を育成する中心的機関といえる。

とはいえ、ここで注意を払うべきなのは、1988年末まで集めてきた資料により編集された『中外民俗学詞典』において、「民具」と「民具民俗学」の二つの項目が立てられたことである。これは、中国民俗学の辞典に民具という分類が初めて登場したという点で意義深いことだと思われる（傍線は

筆者による)。

⁽⁴⁰⁾ 民具：労働人民の日常生活の中に必需的な各種の工具、器皿などの用品である。民俗学の研究対象としての民具は、主に、伝統的な、代々伝承されてきた一切の造型物というものを指す。民俗学では、往々に民具のことを「基本民具」「準民具」「指標民具」など幾つかの種類に区分する。民具の用途、機能、形態、製作要素などにより分類する。時期により、民具には、大体、伝統民具と流行民具、あるいは新しい民具と古い民具、二種類がある（張 1991：173-174）。

⁽⁴¹⁾ 民具民俗学：民間の日常生活の用具を主な対象とする民俗学研究である。民間の日常用具は民間生活の中に欠かすことができないものであり、または、強い伝承性を持っている民俗文化の具象的な表現である。これらのものが、民俗心態に深く反映され、また、他地域、各民族の衣、食、住、用、行についての民俗的特徴を顕著に現す。民具民俗学の主要な役目は、歴史上及び現代の生活における他地域、各民族の民間用具を収集、考察し、その形式、質料、効用など伝承の要素及び民俗的価値を探索し、民俗意識の深層、民俗觀念と発生、発展の規則を掲げる。今は、日本、ドイツの民俗学者らが既に民具民俗学の研究に注目し、その方面の研究に着手した。研究手法は、実物を採集し、図、スライド、映像を作成し、本を印刷し、展覧、陳列を催し、分類を進め、文書を編纂し、分析と研究することである。成果が益々顕著になる（張 1991：174）。

「民具」の定義は、極めて簡単である。「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」との違いが現れたが、宮本馨太郎の「一般民衆が日常生活の必要から製作・使用してきた伝承的な器具・造型物の一切を包含し、国民文化または民族文化の本質と変遷の解明のために欠くことのできない資料である」（宮本 1969：15）と近い。一体誰がその条目を編纂したのか、どんな資料を参照したのかについてははっきりしていなかったが、「造型伝承」と「民具」の微妙な関係（和田 1984：7-35）を考慮するとまた意味深いことになると思われる。

そして、民具の分類を簡単に説明しただけだが、「新しい民具」という表現が使われ、言い換えると、「民具研究」の取り扱うべき「対象」については、厳格的な時代区分から解放されたと考えてもよい。しかし一方では、階層性を強調し、「使用者」の範囲をさらに絞って「労働人民」に限定している。また、「基本民具」「準民具」「指標民具」という三つの表現を用いているが、これが何に拠っているかは明らかではない。この「基本民具」は、河岡武春が提唱したもので、⁽⁴²⁾残りの二つの用語の意味については現段階では明らかにできなかった。

加えて、「民具民俗学」という独創的な考えを持ちながら、「民具」を「強い伝承性を持っている民俗文化の具象的な表現」として把握する上で、「衣、食、住、用、行」という一見したところ生活全般に包含する傾きがあった（またはアチックの分類を精練したように見える）が、その範囲をどこまで拡大したのかは明確にしていなかった。例えば、「住居」を含めるかどうかは文面からは読み取りにくい。

要するに、日本側が行った「民具」に対する綿密な区分と分析に反し、中国側が、定義上の混乱、

混同はともかく、国状によって、地方的特色とともに「民族」の差異も捉え、具体的な実践を促すのがその定義の特色であり、項目を作る目的でもあった。しかしながら、「民俗意識、観念」に注意を向ける必要性が強調されている点については、柳田国男が監修した『民俗学辞典』の「民具」項目に記された通り、「民具に関するそうした面を併せしらべることが民俗学の研究の特色」（民俗学研究所編 1965：582）であると理解していることがうかがわれる。

(2) 橋としての若手研究者

さて、『中外民俗学詞典』の編集長の張紫晨⁽⁴³⁾は当時北京師範大学の教授であり、名高い民俗学者として認知され、もちろん訪日経験があった（韓 2018：57）。張以外の若手研究者で編集に携わった幾人かは日本とのつながりが生まれた。以下、二人を例として挙げてみよう。

現在、北京師範大学で教鞭を執る色音⁽⁴⁴⁾は、1988年から北京師範大学の博士後期課程（民俗学専攻、指導教官は張紫晨）に進学した。1989年に、彼は「中日聯合培養博士企画」に選抜され筑波大学に留学しており、佐野賢治が主宰した「比較民俗研究会」に参加し翌年度に創刊された『比較民俗研究』第一号に寄稿した。1992年に、博士号を取得した後、北京大学でのポストドクターを経て、1995年から国立民族学博物館の客員研究員として1年間訪問研究をした。この流れでみると、色音が民具のことを知るの⁽⁴⁵⁾は不思議ではないが、彼は民具を自分の研究対象としてい⁽⁴⁶⁾なかつた。それでもなお、彼の指導により、二人の学生が中国において民具研究を行⁽⁴⁷⁾った。そのうちの一人が、修士論文から博士論文までフィールドワークに基づき民具を研究し、ある程度この領域の空白を埋めてきた⁽⁴⁸⁾。

または、現在、神奈川大学で教鞭で執る周星が1990年から日中農耕文化の比較研究の調査団に参加し、同団の岩井宏實の影響を受け、1992年から外国人特別研究員として筑波大学に留学し、佐野賢治の示唆から民具などの物質文化に注目した。「姚村：物態象徴的民俗世界」という論文を書き（ただしこの論文の正式な発表は十数年後）、そのなかには「農耕生計と伝統民具」という一節がある。その後、2000年に「民具学与民俗文物：中日民具的比較研究」という住友財団へ提出した研究成果報告書を基に「日本民具研究的理論和方法」の一文も出した。さらに、2018年に「物質文化研究的格局与民具学在中国的成長」という中国における民具研究の研究史をまとめ、現在の研究状況を分析し、中国民俗学の立場から物質文化研究を取り上げる可能性を展望する論文を発表した。

そのほか、杭州大学の日本文化研究所と神奈川大学の人文学研究所は1990年から学術交流を結んでおり、1991年初回のシンポジウムの開催以来、毎年、杭州と横浜、二つの場所で交互にシンポジウムを開いている。民具研究の中心である日本常民文化研究所（以下、常民研⁽⁴⁹⁾と表記）がすでに神奈川大学に招致されており、1992年の会議で、経済貿易研究所と常民研が両大学間の交流に参加することが認められ、1993年に開かれるシンポジウムでは、今後の学術交流のテーマを確立した。「中国江南地域を中心とした日中交流史、及び日中比較文化の研究」がその一つであり、その年の会で、当時常民研の所長を務めていた山口徹が「日本における民具研究の現状と課題」をテーマにして講演した。このような流れで、1994年杭州での報告会では、河野通明が「馬鍬の伝播」をめぐり発表し、1998年杭州で開催された第八回シンポジウムのなか、香月洋一郎が「民具を通しての日本・中国の農村の生活文化比較への試み⁽⁵⁰⁾」という講演も行⁽⁵⁰⁾った。しかし、これらの講演は、ほとんど日本語でなされており、しかも「日本学」の枠組みのなかで行った交流なので、中国民俗学に強く影響を与えら

れなかった。

IV 小括

(1) 訪日研究者と現代中国民俗学の再建

さて、王汝瀾の話に戻れば、1983年11月4日に日本民話の会の第24回例会に参加した後、彼女はインタビューに応じた。来日の目的について、同行の陶陽の「日本の神話を学ぶため」(事・陶1984:34)と違って、彼女は「日本の民俗学を学ぶため」(事・王1984:34)と答えた。ちなみに、同年の5月21日、北京において中国民俗学会が成立した。

上述した二回の訪日の旅、彼女と同行した賈芝、馬学良は当時の中国学界では知名度が高い学者であり、陶陽も民間文芸の分野ではすでに研究成果を出していた。言うまでもなく、彼らに比べ、どうみても王汝瀾は特異の存在であった。民俗学の出身ではなく、研究分野も不明確なまま(中国民間文芸研究会の民俗学部に勤務したが、彼女の研究業績によると、おそらく翻訳とその後の校閲がメインの仕事)、自分が書いた論文は少なく単著もない、今の標準に従えば学者と称するのは難しいのではなかろうか。ただ、前述したように、当時の中国民俗学界においては、彼女は無視できない人物である。中国民俗学の再建のために、鍾敬文が様々な人に働きかけ、日本との交流という重責の一部を彼女に任せたとと言っても過言ではない。

鍾敬文の知遇を得る彼女が自分の語学能力を活用し、自分を媒介者として国内外の学術交流を確実に促進した。

(2) 人の交流と民具の研究

中国では1980年代から本国の民俗学の再建に伴い、日本民俗学の成果を本格的に取り入れていくが、ただちに民具研究が始まったわけではない。それでは、中国における民具研究の始点はいつか。もちろん、「民具」という言葉を用いずとも研究は可能である。ただ、学術用語としての「民具」の中国民俗学界への紹介を始まりだとすれば、中国民俗学界が1983年に開催した「全国民俗学講習班」と、そこでの発表などをまとめた『民俗学講演集』を始点と位置付けていいたい。そして、王汝瀾の1980年代の仕事を中国民俗学界における「民具研究」の第一期(導入・受容期)と位置付けたい。

そして、1988年末までに収集された資料を基に編纂された『中外民俗学詞典』(1991年刊行)において、「民具」「民具民俗学」の二つの項目が立てられたことは、1980年代以後に「民具」と「民具民俗学」が中国民俗学界において認知されたことを示している。

1990年代からのアカデミックな国際交流により、中日研究者たちの中で、民具研究をめぐる知的交流は近年まで続いた。

おわりに

本稿は中日民俗学の架け橋、国際的な知識の伝播に精力を注いだ人物が等閑視されてきた歴史的事

実を紐解くために、「民具」を糸口として検討してきた。

まとめてみると、1980年代前半の王汝瀾による民具を紹介する論文の発表から、1980年代後半に、「民具」「民具民俗学」の二つの項目を収録した『中外民俗学詞典』の出版という、二つの出来事を通して、1980年頃の中国民俗学界には、学科の復活に伴い日本民俗学の研究動向を積極的に取り入れるなかで、物質文化研究の願意が現れたと考えられる。

ただ、本稿で検討したように、短い滞在期間という制約のなかで、王汝瀾がアチック側の「民族学的」民具研究についての理解が不足していたため、彼女が行った民具研究の紹介は不完全であったといえる。また、当時の中国民俗学の脈絡において、民具の趣向がやや置き換えられた。しかし、これらの学者の力を借りながら、僅かながら「民具研究」という物質文化研究の種が中国民俗学界にまかれたことは間違いないであろう。それでは、何故その後の、中国民俗学界において、民具に関する研究の影響が波及しなかったのか。前述した通り、1990年代に入ると、中日両国の民俗学者の往来がますます頻繁になり、そのなかで日本側の民具研究者とのつながりが確かに存在していたにもかかわらず、現在の中国民俗学界においては、そのような接点を利用し、民具研究が発展したと思われる傾向は極めて希薄であるといえよう。

では、1990年代から、中日民俗学の交流の実情は一体どうなっていたのか、民具研究に関わる学術的な動きをめぐって、どのような変化が起こったのか。このような歴史の延長線上で中国民俗学における民具研究の将来はどうあるべきなのかを考えるため、そのプロセスを明らかにしなければならない。したがって、これらの問いを解明するため、さらに引き続き両国の間を取り結ぶ学術交流の活動に焦点を当て、中国側の民具研究の具体的成果を挙げながら、より詳細な検討を行うことを今後の課題としたい。

表1 王汝瀾翻訳年表（民俗学関係または発表した成果のみ）

著作名または学術論文名		著者	発行所発行雑誌等		発行年月日		備考
日本語	中国語		日本	中国	日本	中国	
「孟姜女民話の原型」	「孟姜女故事的原型」	飯倉照平	『首都大学東京人文学報』第25号	中国民間文芸出版社	1961.7	1983.9	顧頡剛、鍾敬文ほか著『孟姜女故事論文集』
『民俗学入門』	『民俗学入門』	後藤興善	火星社	中国民間文芸出版社	1950	1984	
『世界大百科事典』（一節の翻訳）	「民俗学及民俗学的領域」	大藤時彦	平凡社	中国民間文芸出版社	1972 ^[1]	1984	『民俗学入門』に所収
『民俗学の方法』（一節の翻訳）	「民俗学的位置」	井之口章次	講談社	中国民間文芸出版社	1977	1984	『民俗学入門』に所収
『日本の民話 11: 沖縄の民話』	『白鳥姑娘：日本沖縄民間故事』	伊波南哲	未来社	中国民間文芸出版社	1959	1984.12	両書の一部を抄訳する
『沖縄民話集』		仲井真元楷編著	社会思想社		1974		
『日本神話の構造』の一章	「浙江観潮考」	大林太良	弘文堂	上海文芸出版社	1975	1985.6	中国民間文芸研究会上海分会編『民間文芸集刊・第七集』劉琦共訳
『民俗学』	『民俗学』	関敬吾編	角川書店	中国民間文芸出版社	1963.4	1986	龔益善共訳
	「日本民俗学的現状」	伊藤清司		書目文献出版社		1986	『民俗学講演集』に所収
『比較神話学の現在：デュメジルとその影響』の一章	「神話与歴史伝説的結構：最初諸王与王家聖宝中所反映的三效能体系」	吉田敦彦	朝日出版社	中国民間文芸出版社	1975	1986.8	中国民間文芸研究会研究部編『民間文学理論訳叢第1』
『中国少数民族の信仰と習俗』（上巻）	『中国少数民族宗教概覧』	覃光広ほか編著	第一書房	中央民族学院出版社	1993.3	1988.8	伊藤清司共訳

	「人類的兩次起源：中国西南少数民族的創世神話」	伊藤清司		『民族文学研究』		1990	夏宇繼共訳
	「故事、伝承の源流：東亞的比較故事、伝説学」代序	伊藤清司		『民間文化論壇』		1992	夏宇繼共訳
『中国漢民族の仮面劇：江西省の仮面劇を追って』		廣田律子 余大喜編	木耳社			1997	夏宇繼共訳
	「日本の山海經図：關於『怪奇鳥獸図卷』」	伊藤清司		『中国歴史文物』		2002	
『鬼の来た道：中国の仮面と祭り』	『鬼之来路：中国的仮面与祭儀』	廣田律子	玉川大学出版部	中華書局	1997	2005	安小鉄共訳
『日本民俗学入門』緒論の第四節	「民俗学研究的出发点」	柳田国男 関敬吾	改造社	寧夏人民出版社	1942	2005	『域外民俗学鑑要』に所収
『民具のみかた：心とかたち』の第一章	「庶民生活的見証：民具」	天野武	第一法規出版	寧夏人民出版社	1983	2005	『域外民俗学鑑要』に所収
	「江南稲作文化与日本：稻的收穫、乾燥、保存形態的变化及背景」	河野通明		寧夏人民出版社		2005	「農業考古」1998に発表し、『域外民俗学鑑要』に所収

[1] 本翻訳文の末に記入された書誌情報によると、原典は1971年に出版されたものである。しかし、筆者が確認したところでは、この『世界大百科事典』は1972年に出版されたものである。王汝瀾がいつ、どこでこの事典を入手し参照したのかについては知る術がなかった。ただ、注意すべきなのは、この事典の中には、「民俗学」という項目の3ページ前には、「民具」という項目が記されており、民具の図絵も掲載されていた。

註

- (1) 日本民俗学の場合は文芸との関わりが中国より少ないが、その点については、民俗学という学問の起源を遡り「Folklore」と「Volkskunde」の概念から分析する必要がある。本論はそこまで説明する余裕もないが、ただ日本語で中国民俗学史を検討する際に、つねに比較的な意識を持ちながら物事を考えるのは、本論の研究姿勢であるということを示したい。
- (2) 中国民俗学の歴史については以下（直江 1967）（王京 2021）に詳しい。
- (3) あるいは「反省」の名義を用い実際には力が入らなかったこともある。
- (4) 岳永逸（1972-）四川劍閣県の人、文学博士・民俗学専攻、中国人民大学社会与人口学院教授。
- (5) 王京の研究（王 2008）は、日本民俗学界の学者を取り上げ、従来の研究が看過してきた「戦時下の日本民俗学と中国の関わり方」の視点から学史的な検討をした。しかし、彼が扱う時期は戦争期であり、日本民俗学者が赴いた場所も広義の中国の北部に限られた。そのときの中国学界はほぼ中国の南部に移転し、中国民俗学界も例外がなく「北京」に代わり「広州」と「杭州」を中心拠点として活動した。したがって、王が分析に重点を置いたのは、両国の民俗学人の知識的交流ではなく、ただ日本民俗学者の大陸での活動をめぐり、中国が研究の場としていかに発見されたかということを通じて日本民俗学の研究姿勢を問い直す。要するに、中日民俗学界の交流史ではなく、中国民俗学史でもない日本民俗学の学史として位置付けるべきと思う。
- (6) 施愛東（1968-）江西信豊県の人、文学博士・民俗学専攻、中国社会科学院文学研究所研究員。
- (7) 中国民俗学界にすでに有る概念であり、「物質文化」という概念の曖昧さ（物質文化研究が学際的な視点で行われた場合が多いため、この概念が内包と外延も不明確なまま使われた）を考慮すると、本論の場合は、「物質民俗」という用語はよりふさわしいと考える。
- (8) 筆者は中国人であるため、本文は「日中」より「中日民俗学」という表現を使う。
- (9) 文化大革命という政治的な局面を迎えた中国においては、民俗学はブルジョアの学問と見なされ、批判を浴びた。当時の中国民俗学界における代表的な研究機関「中国民間文芸研究会（現・中国民間文芸家協会）」と、その機関誌『民間文学』は、1966年から1978年までの間休刊になり、民俗学の研究も停滞を余儀なくされた。
- (10) 顧頡剛（1893-1980、中国社会科学院歴史研究所研究員、歴史学者）、白寿彝（1909-2000、北京師範大学歴史系教授、歴史学者）、容肇祖（1897-1994、中国社会科学院哲学研究所研究員、哲学者）、楊堃（1901-1998、中国社会科学院民族研究所研究員、民族学者）、楊成志（1902-1991、中央民族学院・現・中央民族大学教授、民族学者）、羅致平（1911-2005、中国社会科学院民族研究所研究員、民族学者）、鍾敬文（1903-2002、北京師範大学中文系教授、民俗学者）。
- (11) この建白書は鍾敬文が起草した。ただ、筆者が確認し得る限り、具体的な日付が不明である。
- (12) 烏丙安（1929-2018）内モンゴル自治区ハラチンの人、遼寧大学教授、民俗学者。
- (13) 劉航舵：烏丙安の妻、遼寧大学教授、ロシア文学研究者。
- (14) 例えば、以下（強・張 1988：63-66）（王文寶 1989：6）などが挙げられる。
- (15) 鍾がドイツ民俗学と物質文化研究の関連性にまで注目したかどうかは確認できていない。ただ『鍾敬文全集・第十卷』（北京：高等教育出版社 2018）によると、彼が国際的な視野を持ち、また積極的に外国のことを吸収するのは確実だ。
- (16) 日本の民具研究は明治初期まで遡ることも可能であるが、本文の場合は論外に置く。
- (17) 王汝瀾は 1982 年第一回の訪日の間で日本の民具研究に注目し始めた可能性が高いと考えられる。ただし、誰が一番早く民具あるいは民具研究のことを知ったのか定かではない。また、台湾における民具、民具研究については今後の課題としたい。
- (18) この「全国民俗学講習班」は 1983 年 7 月 20 日から 8 月 17 日まで開催された。
- (19) 中国語の原文：「除柳田外，高木敏雄、折口信夫、澀澤敬三等也都不愧為日本民俗學的開拓者。尤其澀澤敬三從民俗學初創時期，就提出了通過民具研究民眾生活文化史的卓見，為日本的民族學和民俗學博物館事業，奠定了第一塊基石。」

- (20) 管見の限りでは、1943年以降1982年以前までの彼女の渡航経歴は発見できなかった。
- (21) また彼女の息子（関乃平）が1945年9月に北京で生まれた。
- (22) 王文寶（1929-2014）北京通州区の人、中国民間文芸研究所副所長・民俗民芸部主任を歴任、民俗学者。
- (23) 柯楊（1935-2017）甘肅寧県の人、蘭州大学中文系教授、民俗学者、民間文芸学者。
- (24) 張振犁（1924-2020）河南密県の人、河南大学文学院教授、神話学者。
- (25) 賈芝（1913-2016）山西襄汾県の人、民間文芸学者。
- (26) 馬学良（1913-1999）山東栄成県の人、民族言語文学者。
- (27) 陶陽（1926-2013）山東泰安市の人、『民間文学論壇』副編集長、編集長を歴任、民間文芸学者、神話学者。
- (28) ここで付言すれば、中国民具の収集、展示、研究は、漢民族のものだけを取り扱うのではなく、少数民族のものも含む。ただ、例えば、民博のような国外の学者らが行った中国民具の収集と展示の姿勢は中国本土の学者たちとやや違いがあると考えられる。このなかに現れた差異は今後の課題として検討する。
- (29) この序を書いた時期は1985年6月13日である。最初は『民俗研究』に掲載され、その後『域外民俗学鑑要』に収録された。
- (30) また、同書は河野通明「江南稲作文化与日本：稲の収穫、乾燥、保存形態的变化及背景」1998年第1期『農業考古』(pp.335-343)を収録している。河野は、農具のことについて（函付）少し言及した。今まで中国において民具に関する研究蓄積は、民俗学とは別の系譜があり、農業史、農具史あるいは農業考古学の分野で行われた研究もある。ここでは説明を省く。
- (31) 中国語の原文：「關於日本民俗學研究的簡史，基本理論、基礎知識和研究方法，近幾年已出版了一些書刊。在此我想只談關於日本民具研究的問題。」
- (32) 天野武（1933-）石川県に生まれ、石川県立郷土資料館事業科長、文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官、同部無形文化民俗文化課文化財調査官、同課主任文化財調査官、帝京大学教授を歴任した。
- (33) ヒャクトコ（ク）テダマ：ひゃくとこてだま、百束手玉。多くの小布を縫い合わせたヒャクハギ（百接ぎ）の着物。百枚もの小切れを隣人知己から貰い集め、あるいは自分で用意して色彩調和を持たせて縫いあげた幼児着もの。魔除けの作用を果たすなど、幼児を健やかに育てようと祈願する親心が秘められる。
- (34) 以下、参照：（全2021）。第25回常民文化研究講座「渋沢敬三と日本の近代―越境し総合する知の100年」基調講演「アチック学派の‘知脈’形成と‘常民文化’概念の誕生―人類学史の観点から―」（全京秀）でも言及している。
- (35) 確かに、柳田の民俗資料の三分類「生活外形あるいは有形文化」「生活解説あるいは言語芸術」「生活観念あるいは心意現象」によると、「有形文化」に注目していたことがわかるが、これは物質的なものを指すのではなく、ただ目で観察できる生活外形を強調する意味であり、いわゆる、民具を民俗学の対象として扱う意図がなかった。しかし、彼が決して物質文化の研究に対する関心を持っていなかったとは言い切れない。彼が柳宗悦との有名な対談（「民藝と民俗学の問題」『月刊民藝』1940年4月：24-31）のなかで、「実物から研究に入ったら、民藝よりアチック・ミュージアムの民具を素材としての場合に適する」と発言している。
- (36) 例えば、『日本の民具』（慶友社）シリーズ（4冊）の本の出版社が記されていなかった。また出版時期は1964-1967であるはずが、1966-1967と間違っていた。宮本馨太郎著『民具入門』、宮本常一著『民具学の提唱』などの出版社名も漏らした。
- (37) ちなみに、宮本馨太郎は民具研究の流れから民俗博物館の建設に深く関与した人物のなかの一人である。彼が書いた文章「民俗博物館建設への歩み（1）～（4）」は『民具マンスリー』の1巻（昭和43年）3号から6号まで連載された。
- (38) 鈴木満男（1926-2004）が『柳田・折口以後：東アジアにおける《民俗》のトポス』（世界書院1991）という本のなか（第三章）でこの訪問経歴について言及した。
- (39) 加藤千代（1943-）広島市立大学名誉教授、東京都立大学「中国民話の会」（1967-2011）を作った人物の一人である。1980年12月日本口承文芸学会の第一次訪中代表団に秘書長として参加した。ちなみに、つい最近

になって、中国民俗学界はこの国際的交流の歴史に注目し始めた。「中国民研会与日本「中国民話之会」という特別計画案を立て、重要な機関誌に文章が掲載された。以下、参照：(何彬 2021：35-38) (馬場 2021：39-43) (池上 2021：44-46) (川野 2021：49-53) (飯倉 2021：54-56)。

- (40) 中国語の原文：「民具：労働人民日常生活所必需的各類工具、器皿等用品。作為民俗學研究對象的民具，主要是指傳統的，一代一代傳承下來的一切造型物。民俗學上往往把民具劃分為基本民具、准民具、指標民具等幾種類型。根據民具的用途、機能、形態、製作要素等來進行不同的分類。從時間的角度來看，對民具大致可以分為傳統民具和流行民具，或新民具和舊民具兩大類。」
- (41) 中国語の原文：「民具民俗学：以民間日常生活用具為主要對象的民俗學研究。民間日常用具是民間生活中不可缺少的，也是民俗文化中傳承性很強的實物表現，它們既深刻地體現著各種民俗心態，又鮮明地表現著不同地區，不同民族在衣食住行上的民俗特徵。民具民俗學的主要任務是搜集考察歷史上及現代生活中各地區，各民族的民間用具，探索其形式，質料，功用等傳承因素及其民俗價值，並揭示其深層的民俗意識、民俗觀念和發生發展規律。目前，日本，德國的民俗學家，已經注意開展民具民俗學的研究。研究手段是採集實物、製作圖片、幻燈、錄相、印製圖書、展覽陳列，進行各種分類、編制檔案，分析研究。成果日益顯著。」
- (42) 以下、参照：(河岡 1972：19-25)。
- (43) 張紫晨 (1929-1992) 吉林長春市の人、北京師範大学中文系教授、民俗学者。
- (44) 色音 (1963-) 内モンゴルジェリム盟の人、現北京師範大学社会学院教授、民俗学者、宗教学者。
- (45) 松崎憲三 1996「民俗的調査和記録」陳崗竜訳、色音審校、中国民俗学会編『中国民俗学研究第2輯』pp.235-244, 北京:中央民族大学出版社。この文章は、中国民俗学の1994年の学術検討会で発表されたもので、文の第二節「民俗的調査方法」のところで、「民具調査法」を説明した。
- (46) シAMAN教の宗教用具に関わるものに注目したことはあった。
- (47) 以下、参照：(劉 2010：146-186) (孟 2010：107-133)。
- (48) 以下、参照：(孟 2015；2019)。
- (49) アチック・ミュージアムと日本常民文化研究所の民具研究については、以下(河岡・二野瓶・丹羽・山口(和)・山口(徹)・網野 1986：322-350) (丸山 2013) (加藤 2020) に詳しい。
- (50) ちなみに、香月洋一郎が常民文化研究所の委託研究「生産生活用具からみた日中・日韓の農・漁業の比較研究」というプロジェクトの一環として、1997から1999年まで中国江西省において民具調査を行った(神奈川大学日本常民文化研究所編 2002)。

参考文献

日本語文献 (五十音順)

- アチック・ミュージアム編 1936「民具蒐集調査要目」(アチック・ミュージアムノート第七)
- 天野武 1983『民具のみかた：心とかたち』東京：第一法規出版
- 2019「天野武の民具研究：シリーズ民具と出会う8」『民具マンスリー』52 (6)
- 岩井宏實 1984「民具研究の軌跡と将来」『国立歴史民俗博物館研究報告第3集』千葉：国立歴史民俗博物館
- 王汝瀾 1941年2月「思ひ」『日華学報』東京：日華学会学報部
- 1982「最近の中国民俗学の発展状況について」君島久子・新島翠共訳『民博通信』(18)
- 王京 2008『一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国』神奈川大学 21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
- 2021「学問としての民俗学、学科としての民俗学：現代中国民俗学の葛藤」西村真志葉訳『人文学報・特集 東アジアの民俗学』(118)
- 加藤幸治 2020『渋沢敬三とアチック・ミュージアム：知の共鳴が創り上げた人文学の理想郷』東京：勉誠出版
- 加藤千代 1986「口承文芸研究における日中の交流」『中国研究月報』(457)

- 2008「加藤千代教授略歴および著作目録」『広島国際研究』第14巻
- 河岡武春 1972「民具研究の方法」『月刊文化財』(106)
- 河岡武春、二野瓶徳夫、丹羽邦男、山口和雄、山口徹、網野善彦 1986「座談会 渋沢敬三と日本常民文化研究所」『歴史と民俗』(1)
- 河野通明 2003「絵引はつくれぬものか：歴史への視点」『民具研究』(128)
- 香月洋一郎 2000「民具を通しての日本・中国の農村の生活文化比較への試み」浙江大学日本文化研究所、神奈川県大学人文学研究所編『中日文化論叢：1998』杭州：浙江大学出版社
- 神奈川県大学人文学研究所編 2002『日中文化論集：多様な角度からのアプローチ』東京：勁草書房
- 神奈川県大学日本常民文化研究所編 2002『調査報告第19集：暮らしのなかの技術と芸能：中国江西省と韓国鬱陵島』東京：平凡社
- 韓敏 2018「日本と中国の人類学互動：国立民族学博物館を例」韓敏、色音編『人類学視野下の歴史、文化と博物館：当代日本と中国の理論実践』大阪：国立民族学博物館
- 君島久子 1984「中国民俗学会の成立について」『東南アジア：歴史と文化』(13)
- 国立民族学博物館編 1984『国立民族学博物館十年史資料集成』大阪：国立民族学博物館
- 佐野賢治 1987「中国民俗学の現状」『民俗学評論』(27)
- 色音 1990「中国北方少数民族のシャマン教の現状と研究動向」『比較民俗研究』(1) 茨城：比較民俗研究会
- 渋沢敬三 1992「アチックの成長」『渋沢敬三著作集 第1巻』東京：平凡社
- 事務局（聞き手）1984「特別インタビュー：中国の民間文芸の現状：陶陽さんと王汝瀾さん」『民話と文学』(14)
- 鈴木満男 1991『柳田・折口以後：東アジアにおける《民俗》のトポス』東京：世界書院
- 砂田實編 1940年11月（6月統計）『中華民国留日学生名簿』東京：日華学会
- 1943年（4月統計）『中華民国留日学生名簿』東京：日華学会
- 祖父江孝男、大給近達、中村俊亀智、大塚和義 1978「物質文化研究の方法をめぐって」『国立民族学博物館研究報告』大阪：国立民族学博物館
- 田村和彦 2017「科学技術世界のなかの生活文化：日中民俗学の狭間で考える」『アジア遊学』(215)
- 全京秀 2021「渋沢敬三の「全体」と「自民俗誌」：アチック学派の提言」神野知恵訳『歴史と民俗』(37)
- 直江広治 1967『中国の民俗学』東京：岩崎美術社
- 福田アジオ編 1992『中国江南の民俗文化：日中農耕文化の比較』千葉：国立歴史民俗博物館
- 丸山泰明 2013『渋沢敬三と今和次郎：博物館的想像力の近代』東京：青弓社
- 宮本馨太郎 1969『民具入門』東京：慶友社
- 民俗学研究所編、柳田国男監修 1965『民俗学辞典』東京：東京堂出版
- 柳田国男 1969「民具研究の目標」『民具マンスリー』2(1)（初出は1939年）
- 柳田国男、柳宗悦 1940「民藝と民俗学の問題」『月刊民藝』
- 湯川洋司 1974「民具館と民具研究について：われわれの課題としての」『我楽苦多』(2)
- 1984「民具研究の二、三の問題」『山口大学教養部紀要・人文科学篇』(18)
- 和田正洲 1984「造型伝承論」日本民俗研究大系編集委員会編『日本民俗研究大系 第五巻・造型伝承』東京：国学院大学

中国語文献（アルファベット順）

- 編集部 1985「国外学者来訪」『民俗研究』(1)
- 董曉萍 2002「鍾敬文与〈一国民俗学〉」『民俗学刊』(3)
- 川野明正 2021「中国民話之会的後期活動」楊川力訳『民間文化論壇』(4)
- 池上貞子 2021「從中国民話之会起步」『民間文化論壇』(4)
- 飯倉照平 2021「日本口承文芸学会代表団訪華」加藤千代・文責、何彬訳『民間文化論壇』(4)

- 関乃平 1998「充実の人生軌跡」段躍中主編『負笈東瀛寫春秋：在日中國人自述』上海：上海教育出版社
- 杭州大学日本文化研究中心、神奈川大学人文学研究所編 1992『中日文化論叢：1991』杭州：杭州大学出版社
- 何彬 2021「我和中国民話之会」『民間文化論壇』（4）
- 河野通明 1996「馬鞵（杪）の伝播」杭州大学日本文化研究中心、神奈川大学人文学研究所編『中日文化論叢：1994』杭州：杭州大学出版社
- 加藤千代 1991「在日的活動」「鍾敬文之日本の留学」楊哲編『鍾敬文生平、思想及著作』河北：河北教育出版社
- 教育部編 1939『教育公報』（18）
- 劉昌翠 2010「侗族社区的民具類型：以貴州省黎平縣三屯寨為例」色音主編『民俗文化研究』北京：知識產權出版
- 馬場英子整理 2021「中国民話之会簡介」何彬訳『民間文化論壇』（4）
- 孟凡行 2010「民具の性質与文化結構：以貴州六枝梭戛長角苗民具為個案」色音主編『民俗文化研究』北京：知識產權出版
- 2015『器具：技芸与日常生活：貴州六枝苗族文化研究』北京：中国文聯出版社
- 2019『鄉民行動的物質呈現：一個閩中村落的時空結構、日常生活与文化遺產（1930-2010）』南京：東南大学出版社
- 強心勤、張中立 1988「民俗学与对外開放」『民俗研究』（1）
- 丘桓興 1988「中日民俗的異同和交流：訪鍾敬文先生」『民俗研究』（3）
- 山口徹 1995「日本における民具研究の現状と課題」杭州大学日本文化研究中心、神奈川大学人文学研究所編『中日文化論叢：1993』杭州：杭州大学出版社
- 施愛東 2011『倡立一問新学科：中国現代民俗学的鼓吹、経営与中落』北京：中国社会科学出版社
- 施愛東執筆、中国民俗学会秘書処組織編写 2018『中国民俗学会大事記（1983-2018）』北京：学苑出版社
- 陶陽、王汝瀾 1984「赴日訪学彙報」『我与民間文学：建国三十五周年特輯』廣西：廣西民間文学研究会
- 王文寶 1989「讓民俗学發揮更大的社会効用」『民俗研究』（2）
- 1995『中国民俗学史』四川：巴蜀書社
- 王汝瀾 1982「中国民間文芸研究会代表团訪問桜花之国」『民間文学』（6）
- 1988「略談日本の民具研究」『中国民間工芸』（6）
- 王汝瀾ほか共同編訳 2005『域外民俗学鑑要』寧夏：寧夏人民出版社
- 王素珍 2012「名与実之爭：对中国民俗学史研究的批判与反思」『民俗研究』（1）
- 王文超 2015「從文学到民俗学的物質文化研究」『勵耘学刊（文学卷）第22輯』北京：北京学苑出版社
- 伊藤清司 1986「日本民俗学的現状」王汝瀾訳、張紫晨編『民俗学講演集』北京：書目文献出版社
- 岳永逸 2012a「旁置、艱澁与悲壯の小歩舞曲：憂鬱的民俗学札記之三」『新産經』（6）
- 2012b「旁置、艱澁与悲壯の小歩舞曲：憂鬱的民俗学札記之四」『新産經』（7）
- 2013「民俗学誌与另類的中国民俗学小史：重讀楊堃博士旧文」『民俗研究』（6）
- 2018「學術<同工>楊堃的批評」『讀書』（6）
- 張紫晨編 1986『民俗学講演集』北京：書目文献出版社
- 1991『中外民俗学詞典』浙江：浙江人民出版社
- 周星 2005「姚村：物態象徴的民俗世界」陶立璠、苑利主編『重細重民俗研究・第五輯：國際重細重民俗学会學術會議論文集』北京：学苑出版社（初出は2000年）
- 2008「日本民具研究の理論和方法」周星主編『民俗学的歴史、理論与方法』（上冊）北京：商務印書館
- 2018「物質文化研究の格局与民具学在中国的成長」『民俗研究』（4）
- 鍾敬文 1984「<民俗学入門>序」後藤興善著、王汝瀾訳『民俗学入門』北京：中国民間文芸出版社
- 1985「民俗学訳文集（序）」『民俗研究』（1）
- 1999『建立中国民俗学派』黒龍江：黒龍江教育出版社

- 2002a 「民俗学的対象、効能及学習研究方法」鍾敬文『鍾敬文文集：民俗学卷』安徽：安徽教育出版社
- 2002b 「建立民俗学及有関研究機構的唱議書」鍾敬文『鍾敬文文集：民俗学卷』安徽：安徽教育出版社
- 2018 『鍾敬文全集・第10卷』北京：高等教育出版社

オンライン文献

「王汝瀾先生遺墨」<https://www.chinesefolklore.org.cn/blog/?uid-52-action-viewspace-itemid-20222>. 最終閲覧日：2021年11月28日.